
名有りのオレと、名無しのお前。

闇月 夜留

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

名有りのオレと、名無しのお前。

【コード】

N5396P

【作者名】

闇月 夜留

【あらすじ】

名前がある事は当たり前。

名のある少年は、名の無き少女と会話する。

その少女の事を、少年が思いだす事は、なかった。

オレは、黒月火月。

最近サッカー部に入って、レギュラーになった。

よく「期待のレギュラー」なんて言われてる。

それで、昼飯を食おうとオレは屋上に向かった。

屋上が好きだから。

心地いい風が気持ちよくて、よくそこに足を運ぶ。

すると、誰かとぶつかってしまった。

オレは慌てて声をかける。

「あ！ わ、悪い、ケガ、しなかったか？」

知らない女子だった。

オレは手を差し伸べた。

すると、その女子はにっこりと笑って言う。

「ううん、大丈夫。 ありがとう、黒月くん」

「あれ…なんで、名前…？」

オレはこの女子の事を知らないのに、何でこの女子はオレの事を知ってるんだ？

すると、その女子は笑って言う。

「だって、有名でしょ？ サッカー部の期待のレギュラー」

「ああ…そーゆー事か！」

それなら納得できる。

でも、少し恥ずかしい気がした。

アレ？ オレ、この前…同じような会話を、した様な…？

…気のせいかな。目の前の女子とは初めて会ったんだ。

そして、オレはこの女子の名前を聞いていなかった事に気づく。

「なあ、名前…教えてくれよ！」

「私？私はね…高原！」

オレは異変に気付いた。

普通なら、名前を聞かれれば、苗字と名前を言うものだろう？

なのに、高原は苗字だけしか言わない。

そんな高原に不信感を感じ、オレは聞いてみた。

「名前は？」

高原の顔が、強張ったのに気付いた。

だが、すぐに先程と同じように笑みを浮かべる。

無理して笑っている。簡単に分かった。

「当ててみて！」

「えー…何だよそれ…」

オレは不満そうに言う。

名前を言わない理由があるのだろうか？

でも、オレは見えている。

オレと会話しているとき、高原の顔は、少し悲しそうな顔をするんだ。

それがオレのせいなのか、誰のせいなのか…わからない。

今、聞いても答えてくれないだろうと思い、オレは言う。

「じゃあさ！ 次に会った時、教えてくれよ？」

ビクツと、高原の肩が震えた。

まるで、『次』と言う言葉に、恐怖を覚えているかのように。

そう、例えるなら

もう今にも死にそうで、『また会う』という約束を出来ない病人のような。

いや、病人とは少し違う気がする。

まるで 元から存在していない、そんなカンジの。

「……うん、いいよ！
ただし…私の事、覚えてたら、だけど」

高原の最後の言葉が気になった。

だが、勘繰りすぎはよくない。

オレは自分に言い聞かせ、言う。

「なんだよそれ？　じゃあな！　高原！」

『じゃあな』その言葉に、高原が一瞬、つらそうに顔を歪めたのを、オレは見逃さなかった。

何が高原を悲しませているんだ？

少し話ただけなのに、オレは高原に対する疑問が溢れていた。

でも、今は去らなきゃいけない。

なんだか、そんな気がするんだ。

でも、去ったらもう二度と会えない…そんな気がする。

不思議な感覚に襲われながら、オレは高原に別れを告げ、去った。

アレ？

「オレ…さっきまで何してたんだっけ？」

記憶が抜け落ちたように思いだせない。

誰かと会話していたんだ。

間違いない。

じゃあ、誰と？

そんな会話を？

何処で？

思いたせない。

すると、同じサッカー部の先輩：刈谷先輩がオレに声をかけた。

「オイ、黒月？ 何ボーツとしてんだ？」

「あ、先輩……」

「悩んでると、幸せが逃げるぜー？」

ははは、と笑う刈谷先輩に、オレも笑って、「そうっスね」と答える。

「ただでさえ運がないのに、これ以上不幸になったら大変ですよー」

「で、何を悩んでるんだ？ 恋か？ ついにお前にも春が……！！」

「違いますって！」

オレは刈谷先輩の言葉を弁解し、話す。

「実は…さっきまで誰かと話してたんすけど、誰だったか、とか…
何処で、どんな会話を、とか…思いだせないんす」

「あー…あるよな、そーゆー事。
オレも結構あるぜ」

「そうなんですか？」

「ああ。ついさっきの事なのに忘れちゃうんだ。
まるで…誰かに記憶を消された、みたいなの」

キーンコーンカーンコーン

昼休みの終わりを告げるチャイムが鳴った。

刈谷先輩は「ヤベっ」と言って、慌てて言う。

「次、移動教室なんだ！　じゃあ、あんまり気にすんなよ！
記憶なんて、忘れて当たり前なんだしさ！」

そう言い残して、刈谷先輩は去って行った。

オレも急いで教室へ戻る。

でも、本当は忘れちゃいけなかったんじゃないだろうか。

何か 約束したんじゃないだろうか。

記憶が曖昧で、腑に落ちないまま、オレは教室へと帰った。

(何を忘れたのか、それさえもわからない)

(ただ一つ、言えるとすれば)

(きっと、その話していた相手には、二度と会えないと言っ事を、直感で感じた)

(後書き)

『名無しの私と、名有りの君。』の続編です。

彼は名がありますが、それと同時に、大切な記憶を消されているのです。

一部の人間としか、関わりを持ってない少年と、

関わってもすぐに忘れられてしまう少女。

名がない少女と名を持つ少年。

貴女なら、どちらになりたいですか？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5396p/>

名有りのオレと、名無しのお前。

2011年1月26日23時28分発行